

- 2013/04/29 関西空港と国家の品格
- 2013/04/27 「美しい国」と「国益」、あるいは「ロマン」と「実益」
- 2013/04/25 台湾と日本と「固有の領土」
- 2013/04/23 台湾のネパール
- 2013/04/17 インフレ 10.2%に学ぶ
- 2013/04/16 制憲議会選挙, 11月実施へ
- 2013/04/15 信仰の自由と強者の権利
- 2013/04/13 チティパティに魅せられて(2)
- 2013/04/12 チティパティに魅せられて(1)
- 2013/04/10 レグミ内閣とキリスト教墓地問題
- 2013/04/08 カーターセンターと米太平洋軍とネパール(2)
- 2013/04/07 カーターセンターと米太平洋軍とネパール(1)
- 2013/04/05 丹後の春と過疎化
- 2013/04/03 カーター元大統領：救済者か布教者か？

関西空港と国家の品格

関西空港を利用して、びっくり仰天。「美しい国」の「国家の品格」について、改めて考えさせられた。

関西空港については、以前、[閑古鳥が鳴いていると、その惨状をご紹介したが](#)、いまは様変わり、普通の空港なみにまで利用者が回復していた。理由の一つは、格安航空の参入であろう。見慣れない様々な航空会社が乗り入れ、そこそこ繁盛していた。もう一つは、安倍=黒田バブル経済で、はや人心が浮かれ、プチブル海外旅行が急増しているのだろう。

このように利用者増加は喜ばしいが、品格という点では、関空はいまいちだ。というか、いかにもエゲツない大阪の空港らしい、といった方が適切かもしれない。

関西空港ビルの3階中央に丸善書店がある。高尚な哲学新書でも買うつもりで行ってみると、通路側の一等地陳列台に、なんとエロチックな半裸女性を表紙に掲載したいいわゆる「ピンク本」が、堂々と平積み販売されていた。

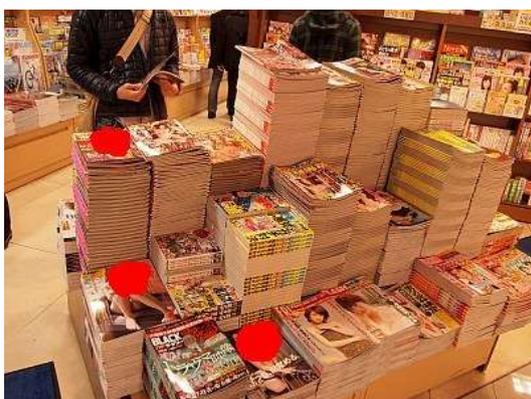
エゲツないエロ・グロは大阪の伝統文化だし、丸善がピンク本を売ってイケナイ理由もない。平積み販売であり、よく売れているのだろう。マンガの次はピンクだ。ピンクを世界に！

ピンク本は、日本国の、特に大阪の誇るべき伝統文化だが、関西空港の一流店舗街の表通りで売るには、相当の度胸がいる。2階に Tsutaya があるので、行ってみると、「成人向け」はあるにはあったが、奥の方の書棚に入れられ、表紙グラビアは一部しか見えないように工夫されていた。

丸善と Tsutaya。センスの差がモロみえた。重厚な洋書やバーバリ等の渋い舶来製品を扱っていたころの丸善、もはやその残り香すら感じられない。

関西空港は、れっきとした国際空港。他の国の国際空港において、このようなピンク本の表通り平積み販売の事例は、あるだろうか？ 私が見た限りでは、ない。

「美しい国」の古き良き伝統は、浮世絵であり、混浴であり、庭先行水だ。外国客人をピンク本平積み販売で古都にお迎えする。「美しい国」の「国家の品格」とは、きっとこのようなものに違いない。



■丸善書店・関空店。矢印の先がピンク本平積み販売台(2013/4/20&23)

谷川昌幸(C)

2013/04/29 19:18

カテゴリ: [文化](#), [旅行](#) タグ: [エログロ](#), [関西空港](#), [国家の品格](#), [性差別](#)

「美しい国」と「国益」、あるいは「ロマン」と「実益」

一昨日、愛国心に自己陶醉し、超国家主義に先祖返りすると、アメリカにも見放され、戦前のように世界で孤立し、再び破滅に向かって転落しかねないと警告したが、それが単なる杞憂ではないと感じさせるような本が出版されている。まだ手元になく読んではいないが、書評がいくつか出ているので、以下に紹介する。

●Thomas U. Berger, *War, Guilt, and World Politics After World War II*, Cambridge University Press, 2012.



1. Foreign Affairs 書評(May/June 2013 ,Twitter Apr26)

「ドイツは、最も残虐非道な国家行為を行ったが、自己のその負の過去を公的に徹底的に語ることで、深い悔悟を幾度も公的に表明してきた。これに対し、日本は、自分を加害者でもあり被害者でもあると見ようとしてきた。」

(<http://www.foreignaffairs.com/articles/139227/thomas-u-berger/war-guilt-and-world-politics-after-world-war-ii>)

2. Time「著者 Q&A: 日本が今なお十分謝罪しないのはなぜか」(Dec11,2012)

「注意深い観察者であれば、よく知っていることだが、近隣諸国との日本の醜い領土争いは、実際には、漁場や石油、あるいはガス田や古来の歴史的な要求をめぐるものではない。日本が固執するのは、第二次世界大戦や長期にわたるアジア植民地支配において、日本人は何も悪いことはしなかったということ、まだ——そう、まだ——認めるつもりはない、ということだ。

これは、近隣諸国がそう見ているということ。そして、これこそが、ちっぽけな小島をめぐる中国や韓国との争いを、いまにも衝突を招きかねない危険なものとしてしまった理由である。……

本書において、著者は、日本が過去の過ちを認めていないと見られているのはなぜか、その理由を解明している。1945年まで続いた日本の半世紀に及ぶ戦争と植民地支配により、2千万人もの

人々が死に、おびたしい人々が支配・抑圧されたのである。」

(<http://nation.time.com/2012/12/11/why-japan-is-still-not-sorry-enough/>)

著者のトマス・U・バーガー氏はボストン大学准教授であり、本書もきわもの時局本ではない。知日派と思われる著者が、このような本を書かねばならないような事態に、日本は立ち至っているのである。

3. 先祖返り「ロマン」と実利的「国益」

現代がグローバル化時代であることは、誰もが認める常識。そのグローバル化時代に、近隣関係をぶち壊し、アメリカにも軽蔑され、世界社会での孤立を招くような愚行に、なぜ突き進むのか？ 復古ナショナリストのお題目たる「国益」を害しているのは、いわゆる「平和ぼけ」の平和主義者ではなく、まさに彼ら、ロマンチックな懐古趣味ナショナリストらだ。

そもそも尖閣でドンパチやっても、日本に勝ち目はない。イザとなったら、アメリカは日本を切る。先祖返りはアメリカへの裏切りだし、ちっぽけな日本よりも巨大中国をとるのは当然だからだ。中国は、現実主義という点でアメリカと同類。日本のロマンは理解不能だが、同類の中国とは、現実主義的「実利」で「実務的」に理解し妥協しうる。

日本は、夢見るロマンチストであり、理解不能の神秘の国。それでも、霞を食って生きる覚悟があれば細々と生きられるかもしれないが、それはイヤ、俗臭ぷんぷん、贅沢三昧浪費生活を続けようとする。破綻必定。

ロマンチックな「美しい国」たらんと欲するなら、鎖国せよ。いやなら、世界社会の中で常識をわきまえて行動する「実務的」な国家となれ。

谷川昌幸(C)

2013/04/27 13:19

カテゴリー: [外交](#), [平和](#), [中国](#)

タグ: [ナショナリズム](#), [ロマン主義](#), [美しい国](#), [領土](#), [超国家主義](#), [国益](#), [安倍首相](#), [尖閣](#), [侵略](#)

[台湾と日本と「固有の領土」](#)

訪台翌日の日曜日(4月21日)、台北市内を見て歩いた。予備知識ゼロに近く、単なる物見遊山だが、それなりに面白かった。

1. 清潔な街と親切な市民

感心したのは、街が清潔で、バイクなどもきちんと整列駐車されていたこと。また、龍山寺や、二二八国家紀念館、中正記念堂、台北植物園なども、すべて無料。美しく管理運営されており、係員も親切だ。



■ 古い下町だが清潔。車用信号にも待ち時間秒数表示 (2013/04/21)

2. 台湾独立デモ

台北駅近くの繁華街交差点では、台湾独立デモ(民進党系?)をやっていた。大きな旗に「建立自由民主的国家 台湾独立 揚棄大中国主義」、「要做台湾国的主人 台湾独立 不做外来者的奴隸」、「廢除国民党殖民体制 台湾独立 創造人人平等的社会」といったスローガンを大書し、練り歩く。

方法はユニーク。交差点の歩道を左回りに何回も回る。青で歩行者と一緒に渡り、赤で待ち、青でまた渡る。エンドレス。整然とアピールしており、通行妨害にならず、警察も阻止しない。

中国語はよく分からないが、漢字から推察するに、これは反政府デモであり、相当な危険が伴う政治的行為であろう。少し離れたところから、警察が監視し、ビデオに撮っていた。



■ 交差点の台湾独立デモ (2013/04/21)

3. 「一つの中国」・「各自表明」・「一国二区」

予備知識ゼロながら、このデモの場合のように、台湾で国家の根本的な在り方に触れることの危うさは、直感的に感じ取ることが出来る。

(1)「一つの中国」

大陸の中国(中華人民共和国)政府は、いうまでもなく「一つの中国」であり、台湾は「中国固有の領土」。中国政府は、このことをあらゆる機会に繰り返し、諸外国に確認させてきた。われらがネパールも、「一つの中国」を支持すると前置きしてからでないと、いかなる外交交渉のテーブルにも着かせてもらえない。それほど敏感な問題なのだ。

(2)「各自表明」

台湾も、長らく逆の立場から、「一つの中国」論であった。しかし、大陸で共産党支配体制が確立すると、中華民国による中国統一はほぼ絶望的となってしまった。

そこで1992年、台湾は中国との間で「九二共識(合意)」を取り結び、「一中各表」の立場をとるようになった。(野党民進党は「共識」に否定的)。つまり、「一つの中国」原則を堅持しつつも、それぞれがその解釈を「表明する」という考え方である。馬英九総統(国民党)は、第2期総統就任演説(2012年5月20日)において、こう述べている。

『私はここで、中華民国憲法が兩岸関係に取り組むにあたって最高の指導原則であるということをご謹んで申し上げます。兩岸政策は中華民国憲法の枠組みのもと、「統一せず、独立せず、武力行使せず」という台湾海峡の現状を維持し、「1992年コンセンサス、一つの中国の解釈を各自表明する(九二共識、一中各表)」を基礎とし、兩岸の和平を推進しなければなりません。そして、私たちの言う「一つの中国」とはもちろん、中華民国のことです。中華民国の領土は憲法に基づき、台湾と中国大陸を包括していますが、現時点で政府の統治権が及ぶのは台湾・澎湖・金門・馬祖にとどまっています。つまり、この20年来、憲法による兩岸の位置付けは「一つの中華民国、二つの地区」であり、3人の総統の時期を通して、まったく変わりはありません。これは、もっとも理性的で実務的な位置付けであり、中華民国の遠い未来を見据えた発展と、台湾の安全保障のよりどころとなっています。兩岸はこの現実を直視しつつ、共通点を求めて相違を残し、「相互の主権を承認せず、相互の統治権を否認せず」という共通認識を確立してこそ、安心して前に進むことができるのです。』(<http://taiwantoday.tw/ct.asp?xItem=190743&CtNode=1892>)



■ 馬総統(総統府 HP)

(3)「一国二区」と台湾独立

この馬総統の「九二共識」・「一中各表」は、たしかに「実務的」であり、折衷的な二面性を持つ。それは、一方では、中国統治への譲歩ないし台湾吸収の恐れがある反面、他方では、「一つの中国」

二つの地区(一国二区)」が、それ自体、論理内在的に、台湾の自治から自決へ、つまり**台湾独立への含意**をもつことも否定できない。その意味では、野党民進党の台湾独立と相容れないわけではない。

グローバル化世界は、まさにその方向に向かっている。国家主権は、EUを筆頭に多くの国で多かれ少なかれ相対化され、各民族・各地域に大幅な自治権が認められるようになってきた。「一国」は、たとえ残るとしても名目に近くなり、「各表」が実質となりつつあるのだ。これが世界の流れ。

台湾の場合、内部に原住民族・本省人・外省人の対立があり、さらにこれに大陸中国との対立があるので、たしかに複雑で難しいが、現代政治の原則そのものからいえば、その地域に住む人々が、その地域のことを決めるべきであり、もしそうであるとするなら、台湾独立に向かうのは時代の流れといえよう。

とはいえ、大陸中国と台湾の対立は厳しい。「一つの中国」か「独立台湾」かのガチンコ勝負に走れば、台湾にはミサイルが降り注ぎ、瞬間に火の海、防ぎようもない。したがって、国民党、民進党いずれの政権にせよ、用心深く「一中各表」を前進させ、実利を拡大して行かざるをえない。それが、現実的な、政治的に賢明なやり方である。「政治」は、もともと「実務」に他ならないからだ。

4. ロマンとしての「日本固有の領土」

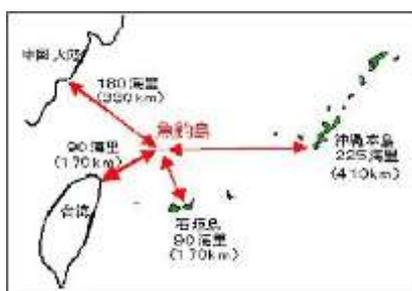
これに比べ、日本の「固有の領土」論は、気恥ずかしくなるくらい**ロマンチック**で、稚拙だ。

歴史をさかのぼれば、人類は地球上をあちこち移動していたのであり、「固有の領土」など、どこにもない。(国際法上の狭義の領土規定はあるが。) 沖縄も北海道も、その意味では「日本固有の領土」ではない。東京の日本国政府に、沖縄を「日本固有の領土」などと決めつける権利はない。沖縄は、そこに住む人々のものであり、まずは彼らが沖縄のことを考え、自分たちで決め実施していく。これが大原則であり、グローバル化時代の世界の流れでもある。

それなのに、安倍首相、石原維新代表らは、時代錯誤のウルトラ・ナショナリズム(超国家主義)を墓場から掘り出し、神国日本の「固有の領土」を守れ、とヒステリックに絶叫している。神国神話で日本は灰燼に帰した。その苦い歴史から、日本は何も学ぼうとはしない。さすが善良なる臣民の国、日本だ。

この安倍・石原流アナクロ国家主義からすれば、沖縄も日本の「固有の領土」であり、お国のためならば、「捨て石」にされても当然ということになる。かつては陛下の大日本帝国のために、そして今は大和人の日本国のために。これは、「一つの中国」を振りかざし、チベットや辺境自治区を抑圧するときの中国政府と同じ論法だ。いや、より正確には、中国の大国的「固有の領土」論の、小国的・内弁慶的矮小化版といってもよいだろう。

いまや、日本のゾンビ超国家主義が日本の「国益」を著しく害していることは、自明の事実だ。尖閣は、**実効支配**していたにもかかわらず、わざわざ「固有の領土」を言い立て、係争地たることを全世界に知らしめ、「国益」を回復不可能なほど損なってしまった。閣僚らの靖国参拝は、近隣諸国の激しい怒りを買うばかりか、世界中でドイツとの対比を再燃させ、日本を孤立に追い込みかねない愚行だ。こんなことを続けていると、中国だけでなく、世界中で日本ボイコット運動が起こりかねない。アメリカですら、先祖返り日本は見捨てるであろう。いま日本「国益」を危機に陥らせつつあるのは、安倍・石原流アナクロ矮小ナショナリズムだ。



■尖閣諸島(外務省 HP)

5. 台湾の実務外交に学ぶ

日本は、中国とのつきあい方を、台湾に学ぶべきだ。台湾は、すでに人間開発指数(HDI)の「高度人間開発達成国」であり、韓国とほぼ同等。フリーダムハウス「世界の自由 2013 年」では、日本や韓国と同じレベルの「自由国」。エコノミスト「民主化インデックス 2012 年」では、やや評価が低く、韓国(20 位)と日本(23 位)が「完全民主国」であるのに対し、台湾は世界 35 位で、「不完全民主国」。しかし、全体としてみれば、指数的には、台湾はすでに日本とほぼ同等の先進国と評価できるであろう。

その台湾にとって、対岸の中国は、日本とは比較にならないほど緊迫した具体的な「脅威」であろう。ロマンチックな「固有の領土」を唱えようものなら、たちまちミサイルが降り注ぎかねない。その緊迫した重圧の下で、とりあえずは「一中各表」により「実務的」に共存共栄を図っているのは、綱渡りとはいえ、高く評価すべきだ。

政治は、もともと愛国心のロマンを追うものではなく、現実的な「実利」のための「実務」だからである。

谷川昌幸(C)

2013/04/25 20:17 カテゴリー: [外交](#), [中国](#)

タグ: [ナショナリズム](#), [ロマン主義](#), [石原慎太郎](#), [領土](#), [超国家主義](#), [台湾](#), [国益](#), [国民党](#), [安倍首相](#), [民進党](#), [民族自決](#)

台湾のネパール

台湾(台北)の明志科技大学で「ネパールの社会と文化」をテーマに、特別授業をしてきた。最近
はパワーポイントがどこでも使えるので、USB メモリ1本を持って行けばよく、便利。少々安易だが、
学生も教員もネパールに行ったことはないということなので、概要の紹介だけでも、それなりの意
味はあったのではないかと、とひそかに期待している。



■ 明志科技大学キャンパスと門前のセブンイレブン看板(2013/04/22)

台湾に行くのは初めて。台北市内は、日本の都市とほとんど変わりはない。ファミリーマート(全
家)、7 Eleven がいたるところにあり、店内にはおにぎり、おでんや菓子など日本と同じ商品がたく
さん並べてある。(ホテル近くに「ローソン」もあったが、これは日本とは別系統かもしれない。) 回
転寿司も多いし、「長崎ちゃんぽん」も見かけた。空港の出入国も、至って簡単。な〜んにも面倒
なことはない。

と、そんな台北で、ネパール(尼泊爾)レストランも頑張っていた。台北駅の美しく広い駅ビル内に、
「五島うどん」と並び、堂々の出店。さすが、ネパール人はたくましい。安くてボリュームがあり、適
度に現地の味に合わせてあるので、美味。台湾でも日本と同様、ネパール・レストランは各地に広
がっていきだろ。頑張れ、ネパール！



■ 尼泊爾咖哩(ネパールカレー) 広告看板(2013/04/22)



■ネパール・レストラン(左)と五島うどん店(右端)(2013/04/22)

【追加】

「ナマステ・カレー」、「塔美爾尼泊爾咖哩(タメル・ネパール・カレー)」というのもある。系列店か、同じ店かもしれないが、ご参考までに。

- ・[Restaurant review: Namaste Curry 塔美爾異國風](#)
- ・[塔美爾尼泊爾咖哩](#)

谷川昌幸(C)

2013/04/23 17:28

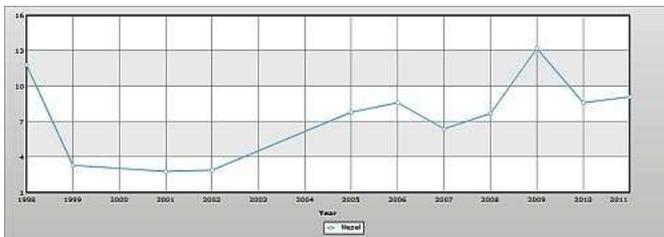
カテゴリー: [文化](#), [旅行](#) タグ: [カレー](#), [台湾](#), [明志科技大学](#)

[インフレ 10.2%に学ぶ](#)

ネパールの3月インフレ率は、堂々の10.2%。食料、衣類、履き物、住宅、公共料金など、軒並み値上がりした。特に食料品の値上がり幅が大きい(Republica, Apr16)。

ネパールのインフレ率(indexmundi)

[1998]11.8, [1999]3.3, [2001]2.8, [2002]2.9, [2005]7.8, [2006]8.6, [2007]6.4, [2008]7.7, [2009]13.2, [2010]8.6, [2011] 9.1



日本バクチ経済のインフレ目標は、たかだか2%。それすら実現は怪しい。10.2%など、夢のまた夢だ。安倍=黒田バクチ胴元は、ネパールに学ぶべきだろう。

インフレ率 10.2%ともなれば、庶民にはたまったものではない。次は、いよいよ本物のプロレタリアート社会主義革命となるのではないだろうか？ これも、バクチ経済ですっからかんになるであろう日本人民のお手本になるかもしれない。

谷川昌幸(C)

2013/04/17 19:46

カテゴリー: [経済](#) タグ: [インフレ](#), [バクチ経済](#), [革命](#)

[制憲議会選挙, 11月実施へ](#)

主要4党と選挙管理委員会、レグミ議長(首相代行)およびヤダブ大統領は、制憲議会選挙の6月21日実施を諦め、11月15-21日実施とすることに、ほぼ合意した。プラチャンダ議長の中国帰国後、正式発表とのこと(ekantipur, Apr15,2013)。

ところが、選管から内閣に送られた「制憲議会議員令 2013 年(案)」をめぐる、またまたもめ始めた。論点は3つ。

- (1)比例制で、得票率 1%未満政党を切り捨てる。
- (2)受刑者は、刑期満了後6年以上の者のみ、立候補資格あり。
- (3)立候補者は、選挙前に所有財産を開示。また、立候補預託金は 5000 ルピー。

この3点について、マオイストと、他の小政党が反対している。もめると、11月選挙も難しくなる。

それにしても、いったい誰が、選挙をこんなに「精緻」に、複雑に、しようとしているのか？ 制度は所詮道具であり、簡明なものに限る。複雑にすればするほど、カネと手間がかかり、内外の選挙産業、セミナー産業、援助産業、そして政党ボスを太らせるだけだ。

先進諸国は、次の選挙では、一切手を引き、ネパールの人々に全部まかせてみてはいかがか。プラスチック投票箱がなくても、コンピューターがなくても、選挙はできる。全部任せてしまえば、ネパールの人々は、自分たちの予算と人員と経験知の範囲内で実行可能なような簡潔な方法を工夫し、選挙を実施するにちがいない。

政治にも、**適正技術**は、ある。



■選挙の高度複雑化(選管 HP)

谷川昌幸(C)

2013/04/16 18:05

カテゴリ: [選挙](#), [民主主義](#) タグ: [適正技術](#), [選挙監視](#), [選挙民主主義](#), [援助](#)

[信仰の自由と強者の権利](#)

1. 強者の権利

自由は、多くの場合、「強者の権利(強者の自由)」である。弱者に自由はない。自由は、一般に、人が何かをしようとするとき妨害や禁止をされず、自分の思い通り行為できる状態を意味する。いわゆる消極的自由(negative freedom)である。この自由は、J.S.ミルが『自由論』(1859年)において論証したように、人間本性の要求であり、この自由により人間とその社会は進歩する。

しかし、その反面、自由が強者の権利であることもまた、疑いえない真実である。自由は、一般に、強者が権益を拡大し確保するため主張される。世界では18世紀末～19世紀の大英帝国や20世紀以降の米帝国、現代日本では大規模チェーン店や宅急便など。強者は、禁止や規制がなければ、自分の力(精神的、物理的、経済的、文化的など)により競争に打ち勝ち得るので、自由を求めるのである。弱者は、自由競争の下では、負けるのみ。

2. 弱者のための自由制限

自由は強者の権利であるという「不都合な真実」は、政治や経済においては、あまりにも露骨なので、その「不都合」を軽減するため、様々な自由制限が行われる。たとえば、ネパール暫定憲法では、包摂民主主義の大原則によりクォータ制など、多くの自由制限が設けられている。あるいは、特定産業保護のための規制は、ネパールだけでなく、どの国でも多かれ少なかれ行われている。自由が制限されなければ、平等はないのである。

3. 信教の自由と神々の自由競争

この点で難しいのが、精神的自由、特に信教の自由だ。日本国憲法は、次のように定めている。

第19条 思想及び良心の自由は、これを侵してはならない。

第20条 信教の自由は、何人に対してもこれを保障する。

このように、信教の自由は、無条件に保障されているように見える。しかし、実際には、これは形式的保障にすぎず、一定の社会的条件が、暗黙の裡に前提とされている。その条件が満たされていなければ、弱者には、実質的な信教の自由はない。

信教(宗教)の前に、精神や魂の本質にかかわるとい点ではよく似ている言語について見ておくと、分かりやすい。

ネパールでは、1990年革命以前の開発独裁においては、ネパール語が国語とされ、国語教育が推進された。先進諸国が日本を含め、すべてやってきたことだ。ところが、1990年革命により他の諸言語の自由も認められ、2006年革命によりその自由がさらに手厚く保障されるようになった。いまでは、どの言語を学び使うかは、本人の自由である。

その結果、どうなったか？ いうまでもなく、最強言語たる英語の勝利だ。少数言語、いやネパール語ですら、形式的な「言語の自由」は保障されていても、実際には見捨てられ、英語化が着々と進行している。言語には言語をもって闘えなどといわれても、どだい言語圏勢力格差は巨大であり、競争にはならない。言語の自由市場競争には公正はない。

宗教は、魂の救済にかかわるだけに、言語の場合に勝るとも劣らず深刻だ。人間と同様、神々も社会の中で闘争し、自由競争が保障されれば、社会的強者の神が勝つ。言語と同じこと。いまネパールで、その神々の自由市場競争が始まりつつある。

4. キリスト教への改宗急増

ネパールにおける神々の競争において優勢に立つのは、いうまでもなくキリスト教だ。『ゴルカパトラ(ネット版)』(4月12日)は、フェイスブックでの次のような議論を紹介している。

英字紙編集長「1985年、政府は、キリスト教に改宗させたとして、キリスト教徒80名を逮捕・投獄した。」

BBC ネパール元記者「20年後の今日、『民主主義』のもとで、政府は、改宗に反対したとして、非キリスト教徒を何人も逮捕・投獄しそうな状況だ。」

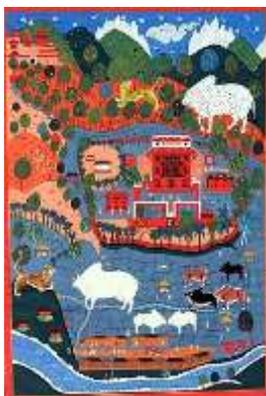
この編集長と元記者の名前は記されていないが、議論は宗教をめぐる現状の核心を突いている。記事によれば、キリスト教への改宗急増は、外からの大量援助によるものだ。教会は都市でも地方でも、いたるところで急増、貧困層、とくにダリットやジャナジャーティをカネやモノで釣りに、改宗させているという。

「たしかに、世俗国家では、どの宗教を選択しようが、自由だ。しかし、ネパールでは、世俗が、貧しいネパール人をキリスト教に改宗させる目的で、悪用されている。ネパール人をキリスト教に改宗させるために使われるカネがいくら正確には分からないが、総額は年数十億ルピーにもものぼるはずだ。また、政党の中には、キリスト教組織からカネをもらっているものもあるといわれている。

このままでは、寺院の街カトマンズは、すぐに教会の街となる。さらに、改宗急増は、社会の平和と調和を乱すことになるだろう。雌牛や雄牛を殺し牛肉を出す店も増えてきたが、これは雌牛をラクシュミ女神の化身と信じているヒンドゥー教徒との対立をもたらすにちがいない。

多くのレストランやホテルは、すでに牛肉を大っぴらに売り始めた。ほんの10年前までであれば、信じられないような光景だ。マハポーダ付近で売られている1皿10ルピーのモモは、牛肉だといわれている。

……偉大な聖者たちは、様々な宗教やそれらの目標に何の相違も認めていない。もしそうなら、改宗しても、たいした違いはない。ところが、それにもかかわらず、多くの人々が続々とキリスト教に改宗しており、これが聖者や修行者や知識人らを心配させている。しかし、彼らには、改宗急増を食い止める手立ては何もないのだ。」(上掲ゴルカパトラ)



■ 聖牛の国, ネパール

5. 経済外強制と経済的強制

この記事に掲載しているゴルカパトラは、体制メディアだから、ヒンドゥー教王国懐旧記事を掲載しても不思議ではない。しかし、それを留保しても、この記事がグローバル市場競争社会化の本質を突く真実を簡潔明快に剔出していることは、事実である。

人は、自由、特に魂や精神の自由を求める。それは人間存在の本質であり、それに反対することは出来ない。建前としての正義は、信仰の自由を掲げる側にある。

しかし、その信仰の自由といえども、社会内での自由であり、たとえ**経済外強制**はなくとも、**経済的強制**は、歴然として、ある。もしそうなら、**経済外強制**は認められないのに、**経済的強制**は許されるのは、なぜなのか？ 経済活動・市場経済は自由だからだ、というのは資本主義社会の強者の強弁にすぎない。経済的弱者は、経済的強制により、事実上、信教の自由をすらも奪われている。

ゴルカパトラ記事が良かったのは、ヒन्दウー教は、キリスト教というよりは、**資本主義教・自由市場信仰**に、抵抗のすべもなく無残にも敗退しつつある、ということであろう。ネパール語や他の民族諸言語と同様に。

谷川昌幸(C)

2013/04/15 16:54

カテゴリ: [宗教](#), [文化](#), [人権](#) タグ: [キリスト教](#), [牛肉](#), [神々の闘争](#), [英語帝国主義](#), [言語](#), [資本主義](#), [国語](#), [市場社会](#), [強者の権利](#), [改宗](#), [信教の自由](#)

[チティパティに魅せられて\(2\)](#)

こちらのチティパティ・タンカは、さらにシンプルであり、好ましい。仏教知識皆無で専門的な絵解きはできないが、それだけにかえて邪念なしに、絵そのものを見ることができる。

この男女は骸骨であり、当然、死んでしまっているが、それにもかかわらず歓喜にあふれている。

近代の哲学者、ホッブスは、死を最大苦＝最大悪と考え、死を防止するための主権国家リバイアサンを構想した。このように、近代人にとって死は如何ともしがたい宿命ではなく、人為により最大限防止すべきものとなった。医学をはじめ近代諸科学の目標は、死の克服である。

このようにして、神仏の加護ではなく、**人為による死の克服**が目標になると、現実の死はとりあえずカッコ(病院など)にいれ、日常生活においては、できるだけ見えないようにされる。あたかも死が存在しないかのような生活が、一般化したのである。

しかし、これは根拠なき生の永続幻想である。そのため、近現代人は、そこはかかない不安に常につきまといわれ、生の無上の歓喜を味わうことが出来なくなっている。

ところが、チティパティの男女は、ホップス流の最大苦＝死にもかかわらず、歓喜雀躍している。あるいは、この男女は、骸骨になっているにもかかわらず性行為中のようにあり、もしそうなら、生(性)から死まで、すべてを悟得して、そこに無限の歓喜はあるといっているのかもしれない。

いずれにせよ、この骸骨男女の表情は、すばらしい。無邪気な歓喜にあふれている。骸骨なのに、生者より生き生きとしている。彼らを見ると、見返され、つい微笑まざるをえない。このような満面の笑みをもって死を迎えられたら、これに勝る幸せはあるまい。



谷川昌幸(C)

2013/04/13 11:39

カテゴリ: [宗教](#), [文化](#) タグ: [チベット](#), [マンダラ](#), [Citipati](#), [thangka](#), [性](#), [死生観](#), [仏教](#)

[チティパティに魅せられて\(1\)](#)

ネパールに初めていった頃、何もかもが珍しかったが、それらの中でも最も深く魅せられたのが、チティパティ・タンカ(Citipati Thangka)である。

仏教の知識は皆無に近く、チティパティについても詳しくは何も知らない。ネット情報によれば、チベットのツァム(仮面舞踏)の祭りに登場する男女の骸骨が「墓場の主(lords of the cemetery)」たるチティパティ(屍陀林王)。

伝承によれば、この 2 人は深く瞑想修行していたため、賊に首を切られても気づかなかったという。チティパティは、このような深い瞑想、人生を果てなき死の舞踏と悟ること、あるいは完全な解脱、を意味するらしい。恐ろしい骸骨姿のため、盗人や悪霊からの守護といった現世利益も期待されているようだが、これはいわば方便であろう。

いずれにせよ、そうした宗教的な深遠なことは、私には分からない。しかし、何の予備知識もなかったが、曼荼羅屋さんでチティパティ・タンカを見たとき、深く魅せられ、どうしても欲しくなってしまう。言い値は、高僧が修行で描いたとかで、かなり高かったが、仏罰も顧みず散々値切り、それでも大枚をはたいて購入し、持ち帰った。

気が滅入ったとき、落ち込んだとき、このチティパティをみると、大いに癒やされ、心穏やかとなる。信心を超えた、深甚な真実の力に大きく包まれるからであろう。



谷川昌幸(C)

2013/04/12 19:36

カテゴリ: [宗教](#), [文化](#) タグ: [チベット](#), [ヒンドウー教](#), [Citipati](#), [thangka](#), [曼荼羅](#), [死生観](#), [世界観](#), [仏教](#)

レグミ内閣とキリスト教墓地問題

キリスト教墓地問題の解決が、レグミ暫定内閣の初の「成果」となりそうだ。カーター元大統領の訪ネも、おそらく影響しているであろう。

レグミ暫定内閣議長(首相代行)は、就任早々、新たな墓地問題特別委員会を発足させた。委員長はビノット・パハディ元 CA 議員、委員は 16 人で、その一人は「ネパール全国キリスト教連盟 (FNCC)」の CB.ガハトラジ書記長。この委員会は、75 郡すべてにキリスト教徒らの墓地を設置することを決め、7 月 15 日までに用地の選定を終える、と発表した。実現すれば、画期的なことだ。

「これまで、キリスト教徒とキラント諸民族は、自費で土地を購入し、墓地として使用してきた。しかしながら、墓はしばしば冒瀆され、墓地は没収された。多くのところで、土地は少なく、一つの墓に 10 遺体も埋葬する有様だった。」(Asia News, Mar21,2013)

キリスト教墓地については、2009 年、パシュパティ寺院の近くのシュレシュマンタクの森が割り当てられたが、ヒンドゥー教徒が猛反発、使用禁止とされた。これに対し、2011 年、最高裁が使用禁止処分の取り消しを言い渡したが、警察もパシュパティ寺院も使用を認めてこなかった(ibid)。しかし、今度は大丈夫だろう、とガハトラジ FNCC 書記長はいう。

「今回は大丈夫だろう。以前のマオイストや共産党政府は、マイノリティを政治目的で利用しただけだったが、新政府は政党利権とかかわらない官僚たちから構成されているからだ。」(ibid)

以前も紹介したように、このところキリスト教徒は急増している。数字は種々あるが、たとえば――

▼国家人口統計

2006 年 キリスト教徒 全人口の 0.5%(カトリック教徒は 4,000 人)

2011 年 キリスト教徒 全人口の 1.5%(カトリック教徒は 10,000 人)

このイースターにも、受洗者は多かった。「洗礼志願者の多くは、2008 年のヒンドゥー教王国崩壊後、活発化したカトリックの学校や慈善団体の活動を通してカトリック教会を知ることになったヒンドゥー教徒であった。彼らは、2 年間、キリスト教を学び、受洗した。」(Asia News, Apr2, 2013)

「これは、キリスト教徒に信仰の自由が認められるようになった近年の状況の好転によるところが大きいですが、それだけではなく、ヒンドゥー教やマオイズム・共産主義の退潮にもよるものだ。この数十年間、マオイズムや共産主義は、ネパール青年の多くにとって自由のモデルであったのだ。」(ibid)

こうしたキリスト教拡大を受け、「殉死者・不明者調査委員会」は、この一月、ジョン・プラカシ神父を、キリスト教徒初の「国家殉死者」とすると発表した。神父はインド生まれのインド人だが、2008年、ヒンドゥー原理主義者に殺害された。発表通り「国家殉死者」に叙されたかは、不明。

いずれにせよ、近年のキリスト教の拡大は、顕著である。ただ、一神教で、死者復活を信じるキリスト教が、ネパールのヒンドゥー教や仏教の伝統とは、原理的に異なる宗教であることは、いうまでもない。

アメリカなどで行われる「遺体防腐処置(embalming)」では、遺体から血液を抜き去り、防腐剤を入れ、スーツやドレスを着せ、埋葬する。もちろん、時が満ちたとき、生前の姿のまま復活するためだ。これに対し、ヒンドゥー教徒は、河岸で火葬後、遺灰はバグマティ川(ガンジス川)に流す。死生観が原理的に異なる。



■防腐処置されたリンカーン(May6,1865)



■ヒンドゥー教徒の茶毘(パシュパティナート, 2009年8月23日)

こうした二種類の宗教が、いまネパールで真正面から対峙し、勢力関係が大きく変わろうとしている。宗教的にも、ネパールは非常に不安定な状況になってきたといわざるをえない。

【参照】[キリスト教](#)

谷川昌幸(C)

2013/04/10 14:54 カテゴリー: [宗教](#) タグ: [カトリック](#), [キリスト教](#), [Carter](#), [embalm](#), [Regmi](#), [墓](#), [墓地](#), [死生観](#), [信仰の自由](#)

カーターセンターと米太平洋軍とネパール(2)

2. 米太平洋軍の軍事援助

カーターセンターの人権・民主主義援助とセットになっているのが、米太平洋軍の軍事援助。タカとハトの使い分けこそ、米外交の持ち味であり、深さであり、強さだ。

(1)米丸抱えの Shanti Prayas II

先述のように、パンチカルの「ビレンドラ平和活動訓練センター(BPOTC)」での「Shanti Prayas II (SP II, 平和活動II)」は、3月25日～4月7日、871人(ネパール416人、外国23カ国455人)が参加し、実施された(ekantipur, Apr8, 2013)。



■ 訓練中のフィリピン兵／村民統制訓練(PACON, Mar30/27)

SP II は、米政府の資金援助により、米太平洋軍 Global Operation Initiative(GPOI)の訓練プログラムの一環として実施された。

SP II には、米太平洋軍トマス・L・コナント副司令官が視察に訪れた。また、終了式にはピーター・W・ボッド駐ネパール米大使が出席し、挨拶の中で、ネパール政府の PKO 努力を高く評価し、BPOTC に約 10 億ルピーを援助することを約束した。アメリカ丸抱え軍事訓練といってもよいだろう(USPACOM, Mar27; ekantipur, Apr8, 2013)。



■ コナント副司令官の訓練視察(PACON, Mar26)

(2)米戦略のアジア太平洋シフト

SP II が、米戦略のアジア太平洋シフトの一環であることはいうまでもない。米太平洋軍 HP によれば、「この訓練は、軍隊間の関係を構築するという太平洋軍戦略の模範となるものだ。訓練参加国の能力向上を援助することにより、米国は、この地域の安定性を高めていくことになる。」

(3)米戦略の民軍協力シフト

また SP II は、米戦略の民軍協力(CIMIC:Civil-Military Cooperation)シフトの一環でもある。SP II を実施した国務省 GPOI は、2004 年設立であり、これまでに 7 万 5 千人を訓練してきた。民軍協力重視・アジア太平洋地域重視である。

「GPOI は、設立後 6 年で、アフリカを中心に 7 万 5 千人の PKO 要員を訓練した。現在、重点をアジア太平洋地域に移し、人道支援・災害対応を重視している。こう、コナント副司令官は語った。」
(American Forces Press Service, Mar26, 2013)

3. 日本の民軍協力訓練

SP II には、日本も参加し、米軍から高く評価された。カトマンズ実施の上官クラス訓練には、なぜか不参加。日本側からの情報が少ないので、理由不明。入れてもらえなかったのかな？

パンチカル BPOTC での野外訓練の方には、カネコ・ヤスヒコ陸曹長、オーカワ・ヒトシ陸自隊員(階級不明)らが参加。小隊(platoon)となっているが、全員で何人参加かは不明。日本大使館 HP をみても、何も出ていない。広報という点でも、SP II の目的と成果を大々的に宣伝し、ご褒美まで出してしまう米国とは、雲泥の差だ。

それはともかく、日本政府が、民軍協力を突破口に、軍事大国化を図っていることは、明白である。たとえば、「日米共催 PKO 幹部要員訓練(GPOISML)」。外務省、米太平洋軍、民軍関係センター(CGMR)が中心となり、外務省において、2009 年と 2011 年に開催された。ネパールなど十数カ国から、軍人、警察官、文民が参加し、日本からも自衛隊、JICA、国際機関(具体名なし)などが参加したという(外務省 HP)。

SP II への日本参加が、こうした民軍協力による軍事大国化の流れに棹さしていることは明白である。



■カネコ陸曹長と陸自隊員(PACON, Mar31)

4. タカに食われるハト

アメリカは、政治大国であり、建前と本音、ハトとタカの使い分けがうまい。民軍協力も、アメリカであれば、産軍複合体があるにせよ、イザとなれば、シビリアン・コントロールに復帰する。アメリカはやはりスゴイ国であり、ぎりぎりのところでは信頼に足る本物の民主主義国だ。

これに比べ日本は、政治的に未熟であり、ハトとタカの使い分けはどだい無理である。民軍協力を始めると、ズルズルと軍民協力を逆転していき、結局、ハトはタカに食われてしまうことになる。

国際平和協力は日本国民の義務であり(憲法前文)、義務は果たすべきだが、その方法は非軍事的手段に限られる(第9条)。アメリカの巧妙な民軍協力作戦を利用するつもりで利用される愚は避け、非軍事的平和貢献に努力を傾注すべきだ。やるべきことは、無限にある。

谷川昌幸(C)

2013/04/08 15:08

カテゴリー: [外交](#), [平和](#)

タグ: [BPOTC](#), [Cater](#), [陸上自衛隊](#), [軍事大国](#), [PKO](#), [太平洋軍](#), [平和貢献](#), [民軍協力](#)

[カーターセンターと米太平洋軍とネパール\(1\)](#)

このところ、ネパールにおいてアメリカの動きが活発化する気配が感じられる。一つはカーター元大統領とカーターセンター、もう一つは米太平洋軍。

1. カーターセンター:世界戦略としての人権と民主主義

カーター元大統領は、先述のように、3月29日～4月1日、ネパールを訪問し、制憲議会選挙の早期実施を勧告し、選挙支援と選挙監視団の派遣を申し出た。他国はおそらく熱が冷め、それほど積極的には支援しないだろうから、次の選挙は米国(およびインド)の応援による選挙となる公算が大だ。



■カトマンズ投票所のカーター夫妻／高地敏感地帯の選挙監視員／エベレスト山麓の選挙監視員(カーターセンターHP)

それとの絡みで注目されるのが、カーター人権外交。カーターがネパールで人権尊重を唱えれば、当然、チベット問題に触れることになる。

事実、カーターは、カトマンズで4月1日、中国政府がネパール政府に圧力をかけ、チベット難民を弾圧させている、と批判した。ロイターによれば、チベットからの脱出者は、これまでは国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) に引き渡されていたが、中国の圧力により、国境付近で「嫌がらせを受けている(facing harassment)」という。曖昧な表現になっているが、実際には、脱出に失敗し拘束されたチベット人は「嫌がらせ」くらいでは済まないだろう。以前からしばしば指摘されているように、中国官憲はネパール側への越境取り締まりですら、行っているのだ。

ネパール国内のチベット系住民の弾圧も、中国政府の要請(圧力)を受け、日常的に行われてきた。マオイスト政府も、もちろん他党以上に熱心にチベット系住民を弾圧した。[この2月13日には、ドルプチェン・ツェリング\(25歳\)がカトマンズで焼身抗議死を決行したが](#)、ネパール政府は遺体の引き渡しを拒否し、密かに、どこかに埋めてしまった。

このように、チベット問題は、中国にとって、おそらく最も触れられたくない問題の一つであろう。カーターは、そのチベット問題に、ネパールで言及した。短い発言だが、たちまち世界中に配信され、大きな反響を呼んでいる。

人権と民主主義は、いわずと知れたアメリカの”Manifest Destiny”であり、外交の武器でもある。いずれも普遍概念であり、これらを振りかざされたら、たいていの国は恐れ入らざるをえない。中国にとっても、これらは軍事力による威嚇以上に対応が難しく、神経をとがらさざるをえないだろう。

カーターは、中国の目と鼻の先のネパールにおいて、そのチベット問題に言及した。これが、米国世界戦略のための熟慮された政治的発言であることはいうまでもない。

谷川昌幸(C)

2013/04/07 20:05

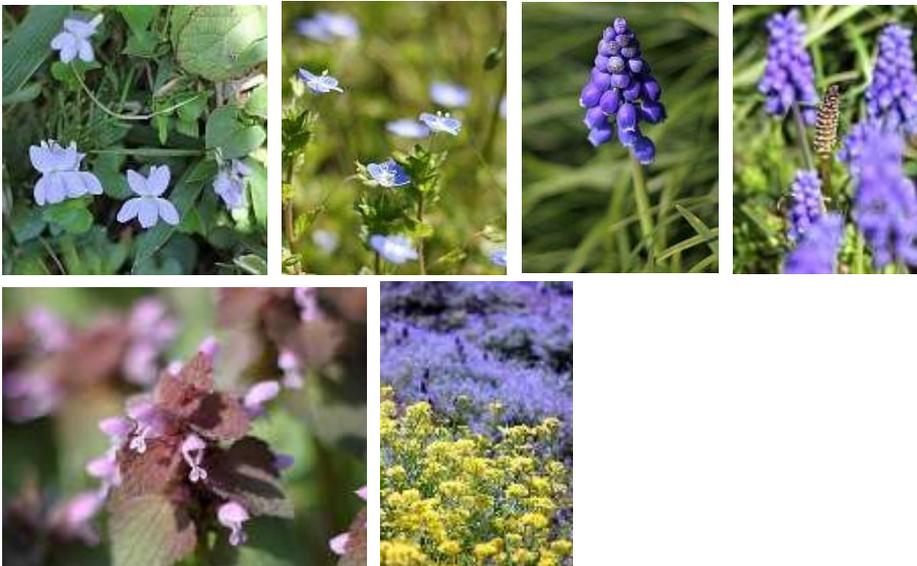
カテゴリ: [選挙](#), [民主主義](#), [人権](#) タグ: [チベット](#), [Carter](#), [選挙監視](#), [難民](#), [manifest destiny](#)

[丹後の春と過疎化](#)

丹後でも、今年の冬は厳しく、その分、野の花々も彩り鮮やかだ。路傍の野草には自然の凜とした気品が、野生化した外来種や古民家前の桜には自然と化した人為の温かさが、感じられる。いずれ劣らず好ましい。



■ 古民家と桜



■ 自宅付近の路傍の野草と菜の花

しかし、その丹後でも、容赦なく過疎化は進み、それを押しとどめるはずの開発は乱雑な自然破壊・文化破壊となっている。山間の田畑や山林のため大金をかけ立派な舗装道路を張り巡らせても、農林業は廃れ、耕作放棄地・放置山林となり、野生動物の天国。舗装道路の最大の受益者は、タヌキやイタチ、トンビにカラスらだ。



■ 舗装農道沿いの耕作放棄田

こうした地方の過疎化は、日本だけでなく、何とわれらがネパールでも進行している。グローバル化は、情報化でもあり、ネパールの農山村の人々も都市や外国の生活を見聞きできるようになった。そして、それを見た若者たちが、次々と故郷を捨て、都市や外国に出て行く。農山村には、老人と女性だけが取り残され始めたという。

グローバル情報化・資本主義化は、政治経済の中央集中化である。アベノミックスが引き金になって、博打グローバル市場経済が破綻することにもならなければ、この不健康な現象を押しとどめることはできそうにない。残念ながら、

谷川昌幸(C)

2013/04/05 12:11

カテゴリー: [社会](#), [経済](#), [情報 IT](#) タグ: [グローバル化](#), [過疎化](#), [自然](#), [市場経済](#), [丹後](#)

[カーター元大統領: 救済者か布教者か?](#)

1. カーター元大統領の訪ネ

カーター元アメリカ大統領が、3月29-31日、訪ネし、ヤダブ大統領やレグミ議長(首相代行)、プラチャンダ(UCPN)、スシル・コイララ(NC)、JN.カナル(UML)、ガッチャダル(MJF)らの党首、そして市民社会の著名なリーダーらと会見した。

多くが歓迎する一方、中には辛らつな批判をする人もいる。カーター元大統領あるいはカーターセンターは、ネパールにとって、救済者か、それともアメリカ教か何かの布教者なのか？



■カーター夫妻(Carter Center HP)

2. ノーベル平和賞受賞者としてのカーター元大統領

ジミー・カーター(88歳)は、第39代大統領(1977-81)として、またカーターセンター(設立1982年)の活動を通して、世界の平和・人権・民主主義のために貢献してきたとして、2002年、ノーベル平和賞を授与された。

▼ノーベル平和賞授与理由

大統領として、イスラエル・エジプト紛争を調停した。また、カーターセンターは、紛争解決、人権保障、選挙監視、途上国開発に大きく貢献した。「カーター氏は、紛争は可能な限り国際法、人権尊重、経済発展に基づく仲裁や国際協力を通じて解決しなければならないとの諸原則を堅持してきた。」(共同, 2002-10-11)

▼秋葉広島市長メッセージ(2002年10月17日)

「被爆地ヒロシマを代表し、貴殿のノーベル賞受賞をお祝い申し上げます。」

3. カーター元大統領とネパール

カーター元大統領は、ネパールについても、特にヒンドゥー教王国崩壊後、関心を高め、選挙実施や人権保障について助言や援助を行ってきた。2008年選挙の時は、選挙監視団を派遣し、報告書を出している。

今回の訪ネに先立って、1月8日、カーターは、カトマンズ・ポスト紙に「ネパール和平には選挙が必要」と題する文章を発表(カーターセンターHPにも転載)、次のように述べた。

「残念なことに、選挙が2013年11月あるいは2014年春実施ということになれば、この間12ヶ月以上も、選挙されていない政府がつづくことになる。」そこで――

- (1) 選管人事を進めよ
- (2) 選挙準備を進めよ
- (3) 有権者登録を進めよ
- (4) 選挙の方法を決めよ

(5)選挙区画の必要な修正をせよ

(6)選挙実施行政機構を整備せよ

選挙民主主義者カーターの(米国の)面目躍如といったところ。この考えに基づき、今回の大統領や議長(首相代行)、各党・各界リーダーらとの会見においても、彼は、カーターセンターからの選挙援助と監視団派遣を提案した。政府や主要諸党は、この申し出を前向きに評価した。

4. 救済者としてのカーター

このようなカーターのネパール関与を肯定的に評価し、積極的な援助を期待するのは、たとえば、自らをリベラル進歩派と考える KC.ゴータム——

Kul Chandra Gautam, “Jimmy Carter and Nepal,” *Republica*, Mar27-28, 2013.

2日連載の長い文章において、KC.ゴータムは、カーターとカーターセンターに対し、積極的な介入と支援を、以下のように要請している。

「カーターセンターがネパールに深く関与し、またジミー・カーターが個人的にも我が国の平和プロセスに大きな関心を持たれていることを知り、私はたいへん嬉しかった。カーターの選挙監視、紛争解決、そして『平和を求め、疾病と闘い、希望を構築するために』は、世界的な経験に裏付けられ、信頼されている。そのカーターの賢明な助言は、ネパールにとって極めてタイムリーなものであり有益なものであろう。」

カーターセンターは、卓越したネパール分析を発表してきた。平和プロセス、制憲議会選挙、憲法制定、地方平和委員会、土地改革と没収土地返却、アイデンティティ政治などについて。

「特に、選挙管理委員会に関するレポートと勧告は、洞察に富むものだった。ジミー・カーターが、ネパールをはじめ、世界のいたるところで平和、民主主義、開発を促進するため崇高な努力をされてきたことを、全面的に支持し、深く信頼している。たしかにカーターを偏狭なアメリカ主義者・キリスト教代弁者と見る人もいるが、私には、このような皮相な見方は受け入れられない。カーターは、米政府の政策に反対する立場を幾度か勇敢にとったし、キリスト教会については、少女や女性にたいする差別を正当化したとして、教会との関係を公に拒否し切断した。これは事実であり、私はそれを尊敬している。」

今回のカーター訪ネの意義を、ゴータムは次のような観点から説明している。

(1)制憲議会選挙の準備。選挙は民主主義にとって最も重要。

(2)連邦制を新憲法の中に書き込むこと

(3)経済発展、法の支配、人間の安全保障の促進

「カーターが、ネパールで会談する人々に、これらの課題について率直に語り、明確なメッセージを与えてくれることを期待する。」

そして、具体的な要望としては――

(1)制憲議会選挙の監視

(2)地方選挙の実施勧告。地方選挙は 15 年間実施されていない。

(3)人権保障, 特に「真実和解委員会」の適正な運営。マオイストや軍にたいする全面免責は認められない。加害者を処罰し, 正義を実現するための支援をしてほしい。

(4)包摂民主主義を促進し, 社会的公正を前進させること。

(5)連邦制の実現。「私は, カーターが, その世界的経験に基づき, ネパール人にこう助言してくれると確信している――すなわち, 平等, 包摂参加, 社会的公正へのわれわれの正当な要求は, アイデンティティ連邦制と同一視されても混同されてもならないということである。」

(6)経済の発展と平等の促進



■カトマンズのカーター元大統領 (Carter Center FB)

5. 布教者としてのカーター

これに対し, カーターやカーターセンターの活動に懐疑的なのが『テレグラフ』の「ジミー・カーター 来訪, 疑惑の旅」(*Telegraph*, Feb.18, 2013)

「第 39 代米大統領ジミー・カーターは, 非キリスト教世界へのキリスト教宣教活動で知られている。そのカーターが, 2013 年 3 月 28 日, また訪ネするとネパール外務省が発表した。

ジミーは, 2008 年制憲議会選挙の時, 自ら選挙監視を買って出て訪ネした。その制憲議会は, 2012 年, 憲法をつくることなく解散してしまった。

思い起こしてみよう。カーターは, 制憲議会選挙がまだ終了していないのに, ソルティーホテル記者会見において, 早々と, 選挙は『自由で公平』に行われたと, 宣言した。

また, 各種報道によれば, 1982 年設立のカーターセンターは, ヒンドゥー王国崩壊後, ネパールにもその活動を広げ, 直々の指導の下で, 密かに, この国にプロテスタント・キリスト教を宣教してきた。実に怪しい訪ネだ！

ネパールのコミューナル平和にお慈悲を, ジミー！……

カーターが、周縁化された諸集団の人々とも会い、イエス礼拝を説くかどうかまだわからないが、識者によれば、少なくとも小政党指導者たちに圧力をかけ、新憲法で改宗勧誘を合法化させようとすることは、確かだという。

ともあれ、カトマンズへようこそ。客人は限度をわきまえよ。ネパールは、まだ孤児にはなっていない。」

『テレグラフ』は、『人民評論』と同じく、保守派メディアだから、多少、割り引くとしても、巷にこのようなカーター批判が少なくないこともまた、事実である。

6. 外に援助を求める不幸

救済者であれ布教者であれ、あるいはカーターであれ誰であれ、援助を外に求めざるを得ないのは、ネパールの不幸である。援助者が悪人であったり援助策が誤りであれば、こんな悲惨なことはない。しかし、たとえ仮に援助者が善人、援助策が正しかったとしても、これはもともと自立精神を危うくするものであり、たとえ瘦せ我慢であれ、可能な限り援助の申し出は断るべきであろう。

幕末維新の日本が、多少、誇れるのは、西洋人を自ら厳しく選考し「お雇い外人」として雇用したこと。幕末日本と西洋との落差は、現在のネパールと先進諸国との落差の比ではないが、それでも福沢諭吉の言葉を借りるなら、「独立自尊」を貫こうとした。のちに日本は本来の「独立自尊」から外れ、視野狭窄、夜郎自大到墮し破滅したが、「一身独立して一國独立す」の気概そのものは、個人にとっても国民と国家にとっても忘れられてはならないことである。

先進諸国は、ネパールの「独立自尊」を尊重できないのなら、援助は断念すべきであろう。

谷川昌幸(C)

2013/04/03 22:30

カテゴリー: [選挙](#), [外交](#), [平和](#), [民主主義](#), [人権](#) タグ: [キリスト教](#), [Carter](#), [独立自尊](#), [包摂](#), [援助](#)